

「大戦秘史リーツェンの桜」館澤貢次著 海をわたった日本人・肥沼信次



肥沼信次

ドイツの教科書に載っている人物に肥沼信次医博がいます。終戦時に発疹チフスが蔓延したドイツの医療センターで唯一人医師として従事し、多数の患者を助け、励まし続けました。この功績を称え少年少女の柔道大会「肥沼杯」が毎年開催され、また「肥沼通り」と名付けられる桜並木があり、さらに名誉市民として彼の墓は今も守られています。



数学の鬼となる

医師肥沼信次は、1908(M41)生まれ、父梅三郎は八王子に「肥沼外科医院」を開業。信次には、2歳上の長男がいたが夭折したので、医業を継ぐ者として厳しく育てられた。信次の末弟も外科医でしたが結核で亡くなっています。

小学生の頃、数学がわからず家庭教師を付けられて徹底的に教え込まれました。ところが中学に入ってから俄然、数学が面白くなり、大学では独語で数学の原書を読んでいます。友達から「難しい本をよんでいるんだね」と声をかけられると「うん」と云って気軽に返事をする大変おとなしい人でした。

大学の卒業アルバムの趣味欄に「数学」と記載しています。すでに「数学の鬼」の片鱗をみせつけていました。

信次は余りに数学に偏り過ぎた為か、1年後に日本医科大学に入学します。その後、34年東京帝大の放射線科に入学しています。

当時、盧溝橋事件から、日中戦争がはじまり、5・15事

件(犬養総理殺害)が起り、ドイツでは世界制覇を目論むヒットラーが総統になり不穏な時世でした。

しかし、憧れのアインシュタインやキュリー夫人が居たドイツに留学することを決意するのです。特にアインシュタインの「誰かの為に生きてこそ人生には価値がある」という言葉が、その後の肥沼の人生を大きく左右する事になります。

憧れのドイツに



37年(S12)横浜港を發ちます。信次29歳。見送りには放射線教室の仲間と母ハツ(51)、弟栄治(26)でした。しかし、これが最後の別れとなるのでした。航海の途中、別府に転地療養している同級生の野口氏を見舞い、そこで母の作った着物をカバンから取り出して嬉しそうにしていたと後に野口夫人は話します。約40日を掛けてスエズ運河を経由して5月末に仏のマルセイユで下船し、汽車でベルリンに到着。母宛てには多数の絵葉書や手紙、写真を送っています。45年の八王子

大空襲ですべてを焼失してしまいました。

信次は、交換留学生として第一歩を歩み、2年後には財団の奨学生に選ばれます。ベルリン大学の放射線研究所では、発がん物質に関する論文において、原子力に基づいた数学的方法を導入しています。



放射線医師として

はベルリン大学教授・資格取得に正教授として何のためらいもなく授得させます。戦前、東洋人では肥沼一人だけでした。

日本人の中の日本人

留学7年目の、44年8月、肥沼信次氏は『日本における自然科学—欧州の影響と独自の研究』という重要な講演を行っています。

日本民族の優秀性として、ライプニッツやニュートンと同じ時期に日本人の「関孝和」は書式こそ違いますが高等な微分学と同一の計算式を考案していること。さらに、人工的に癌を発生させた「山極」や「市川」、そして「吉田富三」の移植による吉田肉腫の発見。さらに、「湯川」がノーベル賞を受ける5年前に肥沼は中間子論を最大限に評価しています。また、雪氷物理学者の「中谷宇吉郎」などを挙げ、もはや日本の自然科学は欧州の弟子ではなく同等の研究者として活躍できることを、誇りに思っています。い



その頃、ノルマンディー作戦は6月に決行されてナチス



は追い詰められていました。

戦火を越えて

戦局も押し迫り、43年には伊が事実上分裂し、独は45年5月、日本は同年8月に降伏します。独が降伏する二ヶ月前に在留日本人(445人)に、帰国の通達が出され、大使館員や在留邦人は南部に脱出しました。それに対し、信次は北部に向かいます。

信次はベルリンで、シュナイダー未亡人と5歳になる娘、家政婦の4人で住んでいました。このベルリン脱出に対しシュナイダー夫人の妹さんが住む43km離れた町エーバ

ルバルデ(Eberswalde)に向かい、そこで診療所を構えました。

5月の終戦で40万人とい大量の難民がポーランドからリーツェンに流れ込んできます。大勢の病人が収容され苦痛とシラミに苛まれ、助けを求めていました。当時、ドイツの東を支配していたソ連軍はリーツェン(Wriezen)に「伝染病センター」を設け医師を探していました。地域の医師は戦争に駆り出され誰も居ません。そこで、ソ連の司令部は肥沼にセンター所長を任命し、市庁舎を病院として9月に開

者は信次のみで赤十字社から派遣された助手が1人、看護婦が7人と調理職員3人が全てでした。看護師の5人は、間もなく発疹チフスで亡くなります。

発疹チフスはペスト(ノミ)、マラリア(蚊)とともに三大昆虫媒介病の恐ろしい病気です。発疹チフスはシラミによって感染し、高熱、頭痛、四肢痛、めまい吐き気を伴い、発疹が現れます。重傷者は心臓の衰弱により死に至ります。

当時、15・6歳の若い看護婦は自分も伝染病にかかるの

ではと、とても心配してしま

「勇敢な兵士のように」

患者が次々と増え続け、ベッドが足りず床に寝かせられた人もいた。埋葬も人手不足のため、足の踏み場もありませんでした。信次はセンター内で一人一人の患者に心を込めて診療にあたるだけでなく、週二回の外来や薬の調達もしました。

さらに、5キロ離れた小さな村の難民収容所や一般家庭の往診もこなしていました。雪が降る凍えそうな夜にも信次は自分で馬車を操って看護婦は後ろのワラの少しでも暖かい場所に居るようといった気遣いをする人でした。

収容所の中は地獄でした。シラミだらけの不潔な部屋にうめき声をあげる人、肌がむきだしの人などが横たわり、あふれかえっていました。そんな状況でも信次は「勇敢な兵士」のように自分の命の危険も顧みず懸命に治療にあたったのです。



伝染病医療センターにて

「幼い命が救われた」

終戦四ヶ月目頃、4人の子どもを持つ母親が、発疹チフスにかかった5歳の娘ギセラをセンターに連れてきます。40度の熱が3日間も続き、母親が冷水で懸命に冷やすだけでした。信次は何度も「薬が欲しい」とつぶやき、大変悩んでいました。4軒あった薬

局も病院も爆撃で破壊され薬がありません。それを聞いた母親は、信次に主人がソ連軍の野戦病院の事務に勉めているといふ話を話します。そこで、信次らは列車でテンプリンという街まで行きます。しかし、そこからは歩く以外になく、野戦病院に着くまで二日掛りました。病院は米軍が引き継いでいて薬は豊富でした。そこで、持てるだけの薬と注射器を調達します。センターに戻り、横たわるギセラさんに投与しますが昏睡状態で回復の見込みはありませんでした。だが、肥沼は「お母さん、がんばりなさい。ギセラちゃんを励ましてあげなさい。少しでも目覚めて何か食べたいといったらそのようにして上げてください」と同じ指示を繰り返します。すると九日目に、目を開け、卵を欲しがります。それを肥沼先生は、一言、「幼い命が救われた」とつぶやきます。その後3週間で歩けるように回復しました。現在、ギセラさんは市内の薬局に勤めています。

その頃、日本も負ける直前で200ヶ所以上の都市が空襲で被災しました。8月2日は



薬を入手するために肥沼医師は馬車で雪の中に

「八王子大空襲」で肥沼医院と住宅は全焼し、信次からの

37歳の生涯

ドイツ終戦の年も明けた、46年1月頃から信次の体調がすぐれなくなり床に。彼が自宅に帰ってくるなりベッドに倒れこむようになることが増えました。これまでになかったことです。

すでに病気に罹っていたにも関わらず信次は医療センターの人たちに知られることなく、患者にいつものように優しく接し、ときばきと看護婦や職員に指示していたので、看護婦の一人が信次の異常に気付いたのは信次が死ぬ一週間前でした。往診が終わって外に出た時「寒い、寒い」と訴えました。翌日センターに來ないので自宅に行くのとベッドに横たわっていました。「医者を呼びましょう」と言うのと、なぜか断られます。「僕はいんだ。僕はいんだ」と、亡くなる2日前の事です。

3月7日、病状はさらに悪化してきました。それでも信次は家政婦に「十六歳の誕生日おめでとう」と言葉を送り、そして「もう一度、桜を見たかった。皆にも桜を見せ



てあげたかった」の言葉を残して、そのまま寝込んでしまいました。センターの職員や家政婦、そしてシュナイダー夫人と娘が彼の枕もとに駆けつけましたが、もはや手の打ちようがありませんでした。不眠不休の勤務から半年後の3月8日午後1時、眠るよう

に亡くなります。享年37歳5ヶ月でした。先生の死の知らせにリーツェンのみんなが涙を流しました。先生はご自分の健康を犠牲にしてまで患者を救うために頑張り、ご自分の命を捧げられたのです。とセンターの関係者は信次の死を惜しみました。

魂は永遠なれ



信次が亡くなって40数年も経過した、89年11月にベルリンの壁が崩れ西洋諸国との交流が開かれました。その翌月に朝日新聞の尋ね人欄に「日本の医師、故コエヌマ・ノブツグ医師（漢字不明）のご遺族、ご親戚の方・・・」の記事が載りました。肥沼龍之介氏が見つけ、信次の実弟栄治さんに連絡しました。そして、肥沼信次の全貌が一気に解明したのです。

栄治さんはリーツェン市との連絡がとれ、日本の桜苗木と顕彰碑のために千ドルを送ります。91年より博士の功績を称えて記念柔道大会「肥沼杯」が命日の3月に開催されるようになりました。参加国はドイツ、ポーランド、日本の三ヶ国の10〜12歳の参加で、大会初日には博士の墓前に献花し、詣でることが慣例となつています。

94年に栄治・八重夫婦はリーツェンに訪れます。そして、市長主催の歓迎会では、信次に名誉市民が贈られ、その席上栄治氏はドイツ語で感謝の言葉を述べました。



肥沼杯記念柔道大会

以来、両国の交流が行われます。

二〇〇〇年七月には、日本医大の同級生や八王子市の多額の善意によって公園に顕彰碑が設置されました。これは、リーツェン近郊在住の芸術家横尾龍彦氏による創作です。15トンの大理石はインドから取り寄せ、彼自身は無償で手掛けました。



大理石の顕彰碑

この石碑には、何も記され

ていません。ただ、円形で、まろやか、全体が曲がりくねった球体から成り立って、凸面から凹面に移行していて、植物の種子にも相応して見えません。

東日本大震災の際には、リーツェンの高校生や市民の方々から、義援金1000ユーロが被害地に贈られました。そして、12年の追悼式に

おいて市長は「肥沼信次の献身的な行動と崇高な人間性は、後世への遺産です」と述べました。

こうして70年を超えて、遠いドイツの人々との心を結んで呉れたのは、肥沼信次博士の凛とした気高さによるものです。



肥沼龍之介氏・・・

信次さんとは父方の従弟の子息にあたる肥沼龍之介氏は、小生(当理事長)の大学の同級生です。彼の実母は彼が6歳の時に亡くなり、信次の父親の弟に当たる安五郎(薬剤師)夫婦に育てられました。信次の母親ハルさんが信次の安否を大使館などに連絡して探し求めて居るのを目にしています。しかし、63年に失意のうちに脳出血で急逝され、同居していた信次の弟栄治さんは、引き続き情報

を知らうと努力しますがベルリンの壁にはばまれた儘だったので。89年にベルリンの壁が崩れ、尋ね人欄「コエヌマノブツグ・・・」の記事により氷解します。龍之介氏は整形外科を開業していました。新潟大学同級生5名は五十路に近づいた頃から毎年集まって親交を深め30年若になります。新潟出身者はいなく、開業医の息子同志であるのも特徴です。主に東北の温泉地で一泊と何時もあわただしい旅行ではありませんが、欠けることなく続いています。彼は、この五山会の一人ですが、これまで信次さんの事



日本からの訪独

は一言も口にしませんでした。小生自身、彼が訪独した8年後に初めて知りました。

大学に入学してまだ間近い頃に、一般教養の物理の時間に難問題が出されました。グループごとで回答をしたのか否かは確かでないのですが、彼による模範解答を得て我々は皆それに従ったのを思い出します。そんな彼でしたが決して堅物ではなく、下呂同志でしたが夜の古町に出て行きました。また、ある夏休み奈川(直線距離75里)までを歩いて帰る計画を立てました。最後まで帰れたか否かは確かめていませんが・・・今年9月、富山の風の盆の

られない処を回ったと喜んで帰られました。

後日、信次さまの事で詳しい内容を知らせてくださいました。新聞で信次さんの記事を知ったのは全く偶然で血縁の一人としてお引き合わせとしか思われたいと綴っています。また、訪独は招待というより親族者の墓参りという意味だそうです。親族者の中には、ドイツ語が堪能で旅行業の方が居られ通訳には苦労しなかつたそうです。墓はともきれいに管理されているので感謝していることですが、残念なことはnobujiがnobuとなっていることだそうです。いずれにしろ、もう少し若い頃に訪問できていたらと残念がっていました。



へ永平寺参拝

家族旅行の帰りに、彼は福井に寄って呉れました。曹洞宗の檀家であり永平寺に参拝しました。案内の雲水とも親しく話をしながら通常は立ち入

『大戦秘史リーツェンの桜 敗戦の地ドイツでチフスと闘い、散った日本人医博』館澤貢次、パル出版、2005『海を渡った日本人・第一巻、ドイツ人にあいざせつ医師肥沼信次』文・館澤貢次、絵・加古里子、瑞雲舎、2003『ヴェーツェンの風のなかで』文・なかむらちる、絵・安藤香子、開発社、2010

二〇一五年十一月始
文責 ふじた たけひさ